

断続的に伝わる絵画

岸駒「龍虎双幅」 がんく りゅうこ そうふく

(草津宿本陣蔵)



草津宿本陣には、江戸時代に高貴な人のみが利用できる休泊施設であったという歴史故か、当時の著名な画家による絵画類が残されています。

岸駒筆の《龍虎双幅》もその一つです。

昭和3年(1928)1月6日の『大阪朝日新聞滋賀版』で、本陣第12代当主・田中森之助氏の紹介と共に、本図に触れられています。記事によると、双幅のうち龍図は焼失したと伝えられていたようで、当本陣の明治天皇行在所としての史蹟指定に関わる調査で発見された可能性が考えられます。

作者である岸駒(寛延2年〔1749〕または宝暦6年〔1756〕～天保9年〔1838〕)は、江戸時代中期～後期、

京都画壇で隆盛を誇った岸派の祖である画家です。特に虎の描写は「虎図は岸駒」と言われるほどでした。当時は本物の虎が見られなかったため、岸駒は虎の皮や頭蓋骨を入手し観察することで写実性を追求したようです。天保4年(1833)には、岸駒の息子で岸派二代目の岸岱(がんだい)が当本陣に宿泊し、本図の箱書きをしています。

龍虎図の虎は迫力ある姿がよく見られますが、本図では前脚をそろえておとなしく座っており、しっぽはかわいらしい印象です。双幅を並べ見ると、龍図はぼかしを多用する一方で、虎図は比較的輪郭が明瞭でコントラストが強く、表現の対比も魅力です。

(令和3年8月・史跡草津宿本陣 松浪 千紘)